

平成22年 6 月 1 日現在

研究種目：若手研究 (B)
 研究期間： 2007 ~ 2009
 課題番号： 19720130
 研究課題名 (和文) 英語圏語学学校での民族交流と留学成果の国際比較：日本人の個人的留学経験とその影響
 研究課題名 (英文) The role of inter-ethnic relations in ESL sojourners' conceptualization of achievement: an analysis through Japanese students' study abroad experience
 研究代表者 小林 葉子 (Kobayashi Yoko)
 岩手大学・人文社会科学部・准教授
 研究者番号：00352534

研究成果の概要 (和文)：過去2年間の研究 (科学研究費補助金若手研究 B「日本人学生の短期語学留学の成果と課題—カナダの語学学校での調査—」) を発展させた本研究 (3年間) の成果は2タイプに分類できる：(1) 理論的論評発表 (海外における異文化間交流と言語使用態度に関する先行文献への貢献) (2) 現地調査結果 (主要英語圏カナダと準英語圏シンガポールの英語学校に在籍する日本人学生たちの多様化する留学動機)

研究成果の概要 (英文)：Expanding on the past two-year research project funded by the Grant-in-Aid for Young Scientists (B), the present three-year research project has yielded two types of research achievements: (1) a set of theoretical studies that contribute to the extant literature knowledge base on interethnic relations and language use in overseas contexts; (2) a set of empirical studies conducted at English language schools in Canada (Inner-Circle nation) and Singapore (Outer-Circle nation) that reveal Japanese (and other international) students' diversifying motivation to study abroad.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
19年度	800,000	0	800,000
20年度	700,000	210,000	910,000
21年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2000,000	360,000	2360,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：留学研究、留学動機、異文化コミュニケーション、集団間関係、社会的アイデンティティ、「英語圏」、「標準英語」、批判的教育学

1. 研究開始当初の背景

- (1) 英語圏語学留学の大衆化・商業化・多様化・非言語学習化
- (2) 語学留学生と現地住民との交流の少なさ (量・質)

- (3) 語学留学生同士の交流の多さ (日本人同士、「アジア人」同士)
- (4) 第二言語教育学・習得学研究内容 (海外語学留学の言語習得への効果) と現状との差の拡大

2. 研究の目的

(1) 個人語学留学動機の多様化が、留学満足度にどのように影響しているか。これまで言われているように、目標言語上達の度合いも影響し続けているのか。

(2) 民族・人種意識が語学留学生間交流にどのような影響を及ぼしているのか。日本人学生、他のアジア系学生、ヨーロッパ系学生という集団カテゴリーは有意義か。

3. 研究の方法

- (1) 先行文献を踏まえての文献調査
- (2) 英語圏語学学校における現地調査

4. 研究成果

(1) 文献調査結果をまとめた論文5本（うち、2本は国際ジャーナル掲載論文）

(2) 現地調査結果をまとめた論文3本（3本いずれとも国際ジャーナル掲載論文）

(3) 国内・海外にて学会発表6件（海外国際学会発表4件、国内全国学会パネリスト発表1件、研究会発表1件）

① 文献調査研究成果（4(1)の一例）

以下の結果は主要な教育系国際ジャーナル(Higher Education, Springer 出版社)に掲載された。

一次データ（半構造的質問紙、インタビュー、参与型観察、フィールドノート）と二次データから得られた、一見矛盾すると思われる異文化コミュニケーション態度に焦点を当て、社会的アイデンティティ理論とカテゴリー化プロセスの観点からその説明を試みた：

(1) 英語圏在住の日本人と他のアジア系間の相互連帯意識構築と、現地白人との限定的な交流と「西洋」へのあこがれ意識維持

(2) 日本在住のアジア系に対する差別意識・態度と、白人（英語ネイティブ話者）への積極的・好意的見方（「国際化」との連想）。

英語圏でのアジア系間の異文化交流経験が、ステレオタイプ化された「西洋」イメージに影響を与えることが難しい背景を考察し、異文化コミュニケーション研究に提言を行った。

② 現地（カナダ）調査成果(4(2)の一例)

言語教育系の主要全国ジャーナル（JALT Journal, 全国語学教育学会）に掲載された。

英語圏語学学校に在籍している個人留学生(IND-Individual Participants)と集団での研修参加生(CHA-Chaperoned Participants)の2集団（各26名、48名）を対象とし、英語でコミュニケーションしようとする気持ち（WTC-Willingness to Communicate in English）、自らの英語力観

(ENG-Perceived English Skills)、語学留学への満足度(SAT-Satisfaction)、外向的性格(EXT-Extrovert Personality)において、統計的に差が見られるかどうか分析した。

その結果（表1）、集団で語学研修に参加している学生たちのほうが、個人留学生よりも英語でコミュニケーションしようとする気持ちが弱く（WTC-Willingness to Communicate in English）、また自らの英語力観(ENG-Perceived English Skills)を低く評価していることがわかった。しかし、語学留学への満足度にはグループ間に差は見られなかった。こうした結果を語学留学の大衆化と動機の多様化という面から考察した。

表1 個人留学者と集団留学者の比較

	M		df	F	P
	IND	CHA			
	(N=26)	(N=48)			
WTC	6.96	5.69	(1, 72)	22.58	< .001
ENG	.11	-2.46	(1, 72)	14.21	< .001
SAT	15.23	14.40	(1, 72)	2.53	.12
EXT	10.92	10.58	(1, 72)	.28	.60

Note: 二番目の変数 ENG（自己英語力観-Perceived English Skills）は異なった metrics に基づく5つの項目によって構成されており、上記の分析用に Z-scores に変換されている。

③ 現地（シンガポール）調査研究成果(4(2)の一例)

以下の内容は国際会議（The 16th Annual Conference of the International Association for World Englishes 2010年7月25-27日バンクーバー）にて発表予定である（採択済み）。

シンガポールなどの「準英語圏」(Outer Circle)に英語語学留学する日本人・韓国人・中国人がかなりいるようだが、そうした学生は「白人英語話者」「西洋へのあこがれ」を軸とした「国際化」意識からは脱却しているのだろうか。そうした学生たちが増加するこ

とで、社会的な影響はもたらされるのだろうか。

シンガポールの英語語学学校についての準備調査（ネット上での情報収集、現地校訪問、政府関連機関訪問など）を行ったあと、現地英語学校3校からの協力の下、スタッフと日本人学生より一次データ（半構造的質問紙、インタビュー、フィールドノート）を収集した。

調査の結果、日本人学生たちを含め、「非英語圏」(Expanding Circle)からの学生たちの多くは、Outer Circleのシンガポールを「主要言語圏」(Inner Circle)と同一視し、Inner Circle出身の白人教師から「標準英語」を学ぶことを期待しており、英語教育産業もそうした白人英語ネイティブ英語(white 'standard' English)を「高い教育水準」(quality education)として位置付けていることが明らかになった。つまり World Englishes という概念が応用言語学内では認知されている中、そうした学術的知見が一般の英語学習者に貢献していない。

さらに他の英語圏や日本国内にて他のアジア系学生たちが感じているように、シンガポール留学中の日本人学生に関しても、戦中に対する関心は薄い(Kobayashi, 2006; 2010と同じ結果)。アジアにおける日本の優位性について言及する言葉が散見されることから、帰国し多数派の立場に戻るとまもなく、「国際化」と同一視されないアジア系留学生との交流への興味が薄れていく(留学前の状態に戻る)可能性が高い(Kobayashi, 2010にても議論)。

④ 海外学会発表内容(4(3)の一例)

以下の内容は口頭発表用プロポーザルが査読・採択されたあと、論文として投稿したものである。

第二言語学習研究・海外留学研究・異文化コミュニケーション研究などを主にした文献調査論文。アジア系学生の特徴として集団主義や沈黙が本質主義的に固定化していることを指摘しつつ、学術的にも対照的に位置づけられることが多いアメリカ人学生を対象にした語学留学研究文献を概観し、アジア系学生ステレオタイプ問題に有効な知見をまとめた。

⑤ 海外学会発表内容(4(3)の一例)

以下の内容は、論文としてまとめ、国際学会に発表したものである。今後さらに分析を進め、論文の完成度を高める予定である。

Kobayashi (2007)では調査参加者の日本人語学留学生216名のうち、元社会人の女性に焦点を当てたが、男性は26.3%(n=57)であり、元社員・現無職の男性は全体の5%(n=10)であった。

本調査ではKobayashi (2007)から得られた元社会人女性の長期留学動機についての結果を比較するため、前回のインタビュー調査に参加してくれた元社員長期留学生男性1名に加え、本調査インタビュー参加者男性の5名のうち元社員長期留学生2名のデータを加え分析した。

さらに母集団の数が女性と比べ非常に小さいことが予想されたため、語学学校関係者(経営者、教師、日本人・カナダ人スタッフ)11名にインタビュー調査を実施し、日本人留学生に見られる男女差について見解を求めた。

その結果、留学動機に顕著な男女差は見られなかったものの、日本社会における女性の位置付けと英語の価値の違いが、男性にとって長期語学留学がリスクの大きい選択になっていることを考察した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計8件)

(1) KOBAYSHI YOKO,

'Discriminatory attitudes toward intercultural communication in domestic and overseas contexts', *Higher Education* (Springer社出版), 査読有, 59(3), 2010, pp. 323-333.

(2) KOBAYSHI YOKO

'Accessibility of the sojourn experience and its impact on second language study, education, and research', *JALT Journal* (全国語学教育学会出版), 査読有, 31(2), 2009, pp. 251-259.

(3) KOBAYSHI YOKO

'American sojourners' research: implications for Asian ESL students' groupism', *The Proceedings of the 13th International Conference on English in Southeast Asia*, 査読なし(学

会 proposal 提出・申請時のみ), 2009, pp. 142-149.

- (4) K O B A Y S H I Y O K O, 'Japanese working women and English study abroad', *World Englishes* (Wiley 社出版), 査読有, 26(1), 2007, pp. 62-71.

- (5) K O B A Y S H I Y O K O, 'TEFL policy as part of stratified Japan and beyond', *TESOL Quarterly* (TESOL Inc. 出版), 査読有, 41(3), 2007, pp. 566-571.

[学会発表] (計6件)

- (1) 小林葉子, 「コミュニケーション教育と英語コミュニケーション教育—多学問的考察—」, 第39回日本コミュニケーション学会年次大会「支部会パネル」(東北支部代表パネリストとして発表), 2009年6月27日, 新潟星稜大学短期大学部(新潟市)

- (2) K O B A Y S H I Y O K O, 'Being the most reserved in overseas ESL classes to secure the most dominant status back in Japan', The 30th Annual Conference of the American Association for Applied Linguistics (AAAL), 2008年3月29日, アメリカ合衆国, ワシントンDC, Omni Shoreham Hotel.

- (3) K O B A Y S H I Y O K O, 'American sojourners research as implications for Asian ESL students' groupism', The 13rd English in South-East Asia Conference, 2008年12

月5日, シンガポール, National Institute of Education, Nanyang Technological University.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小林 葉子 (KOBAYASHI YOKO)
岩手大学・人文社会科学部・准教授
研究者番号: 00352534